

巻頭言

アカデミー生活も後1カ月を切った。この間、ロンドン・オリンピックがあり、尖閣や竹島を巡って日中、日韓が鋭く対立した。シリアでは日本人ジャーナリストが内戦に巻き込まれて死亡した。国内では消費税増税法案が曲折を経て成立してしまった。高知ではよさこい踊りがあり我々も参加した。

内外のニュースが目まぐるしく変遷する中、土佐山は平和だった。ブータンのように幸福度指数は高いかもしれない。

一方で、個人的には高川地区でインシンの殺生と解体作業に遭遇した。人間が生きるために生き物を殺しているという現実を目の当たりにした。山の生活はきれいな事ばかりでは済まないのだ。（伴武澄）

ツリーハウスが完成

組立はボルトとロープ

土佐山アカデミーは18日、かわせみ館近くの山中で、ツリーハウスの組立作業を始めた。ほぼ3日にわたる作業で27日夕刻には完成間近となった。

太いところでは30センチもある丸太を何本、手ノコで切っただろうか。1本1本皮をはぎ、数百メートル運んで滑車で約5メートルの高さにまで引き上げた。木の上にはしごを掛け、丸太で床を張った。柱も4本立った。

組立はすべてボルトとロープ。受講

生による作品第1号である。そのうち土佐山の子どもたちの知れるところとなったら楽しい。



返杯ってホンマ楽しい

高川地区に住まわして頂いてる大阪出身徳島在住の金光子（キム ガンジャ）です。土佐山では、いろんな初体験をさせてもらいました。

苔玉作り、神祭、返杯、ハシケン、櫓建て、竹の伐採、竹割り、竹の加工薪割り、炭作り……。あと、カミキリ虫の蛹のソテーも。

土佐山は、自然の資源が豊富で、思い立ったら何でも出来る土地なんだとつくづく思いました。

返杯では、見事に記憶が飛びまくって、色んな方々にお世話になりましたが。大阪や徳島には、返杯という素敵な風習がないので、帰ったら広めていきたいと思います。

ホンマに、残り僅かの土佐山の生活ですが、まだまだ色んな経験を積みたいたいと思っています。土佐山の美しい石組みや、伝統工法や、美味しい土佐山料理の作り方等。あと、アカデミー終

了後は徳島に帰りますが、柚子の収穫や、お庭の剪定のお仕事があったらいつでも駆けつけます。後、1カ月どうぞ宜しくお願いします。

ござの上で南無阿弥仏

虫送りの光景

旧暦の6月20日、立秋、土佐山地区の虫送りに参加させてもらうことになった。虫送り、という言葉を高知に来て始めて聞いた。「どういう行事ですか」と聞くと、「昔は田んぼとか畑とかにたくさん虫がつきよったけえ、その虫を追い払うちゅうことやね」と教えてくれた。

虫送りはお宮で行われると聞いていたが、そのお宮が道路の脇にある、小さなお宮であるのにまず驚いた。古びてきたので、作り直したばかりとのことで、屋根がぴかぴか光っている。餅、ご飯、味噌汁、野菜や菓子などが備えられ、お坊さんの読経が始まった。お宮の上には、片方の草鞋と、紙で作った人型が祭られている。

読経がひと段落すると、道路の脇に敷いたござの上に地区の人20名ほどが座り、「なみあぶだんぶつ」と唱えながら、木製の大きな数珠を回していく。一周したところで、「はんみしゅくどく・せいっさい・そうほつぼ・大師しょうめうあみだも・こうめいへんしょう・じつぼう世界念佛・しゅしょうせいしゅうしゃー」と唱え、それを繰り返す。

お坊さんは今度はその様子を見ながら読経を続ける。

木の数珠の大きさはひとつひとつ違って、しかもところどころひび割れている。土佐山の人々は慣れた様子で、子どもたちは楽しそうに、数珠を回す。

私の住む神奈川県では、見たことのない光景で、なんとも不思議な気持ちだった。

虫送りを終わると、公民館でおきゃくが始まった。夏休み中の子どもたちは、スイカとおやつをもらって、すぐに遊びに出て行ってしまった。「あの子どもたちも、大きくなったら虫送りをするのだろうか？ 今日のことをどんなふうに覚えているんだろう？」とふと思う。

アカデミーのスタッフで高知出身の堪ちゃんは、「僕も子どもの頃は虫送りをやっていましたが、今はやってませんね」と言っていた。「文化がなくなる」という言葉をよく使うけれど、虫送りをしなくなるようなことが、まさに文化がなくなるということではないかと思った。今日、虫送りをした子どもたちが大人になったとき、また自分の子どもたちと一緒に土佐山で虫送りをしていたらいいと思う。(吉本紀子)

みんな初体験、炭焼き

旧暦の七夕の前後、高川公民館近くで炭焼きを体験した。今も年に何回か炭焼きを続けている炭焼きクラブのおんちゃんたちに助けられ、真夏の炭焼きを行おうというのである。

土佐山では数十年前まで炭焼きをなりわいとしていた。忠男さんによると、昭和30年代まで、それぞれの家が山に小屋を持っていて、夫婦と子ども、3、4人で木を切り、窯入れをした。今

なら細いながらも舗装道路があるが、当時は歩く道しかなかった。出来上がった木炭は俵に入れて川べりの県道まで担いで下ったという。

授業が始まった。樫の木を中心に山で木を切り、太い枝は半分、4分の1に割る。チェーンソーは使わない。鉄のタガを割れ目に入れて鉄ハンマーで割る作業はけっこうな力仕事だ。重たい上に樫やツバキは硬いのだ。



1.5mから1・5mぐらいに切った木を今度は窯にじゅんぐりに入れるのだが、並べるはプロの大崎さんの仕事。中から大崎さんが大声で「センチ、何本」と叫ぶと、ぼくらは適当な長さの木を選んで窯に運び込む。窯の上部に隙間ができると完全燃焼してしまうので、ぎりぎりまで木を詰め込む。ここらがテクニックなのだそうだ。

僕は特別に竹でつくったコップを2つ、窯に入れてもらった。炭化しないで燃えてしまうかもしれないと言われたが、万が一でも真っ黒な竹製のコップができれば嬉しい。

2日目の終わりに窯は木でいっぱいになった。外に山積みとなっていた木の枝がほとんどなくなったから、相当の量の木が窯に入ったことになる。入り口を石と土で完全に密封し午後4時に火を入れた。

労働の後、バーベキューをしてもらった。その後、みんなで道路に横たわって星をながめた。堪ちゃんが「旧暦の七夕には天の川が見える」と言って

いたが、お酒が回っていて、星がきれいだったことしか覚えていない。(伴武澄)

思いあつての町づくり

七夕の短冊を見て

7月の初旬の事、BAL土佐山の近くの橋の上に『みんなの願い:土佐山小』という画用紙とともに土佐山小学校と地域の方々の願いを書いた短冊が飾られていた。

どれどれ最近の小学生はどんなことを書いているのだろうと、見てみると「〇〇になりたい」「〇〇がうまくなりますように」だとか私が小学生の頃と同じような願いの短冊が並んでいて懐かしいなと思いながら読み進めていった。

ほとんどの小学生が自分への願いを書く中、目を引く短冊があった。

その短冊には『土佐山の自然を残してほしい』と書かれていた。自分の住むまちの事を想い願いとして短冊に書く、そんな小学生が土佐山にいるんだと思い嬉しくなった。



稚内に半年程いた際にも感じたこと。まちづくりにはヨソ者が必要だと言われているが、やっぱり地元のひとの思いがあつてこそであつて、こういったまちの事を想っている人が思いを伝えていくことでそのまちはよくなるのではないかと。

想いのこもった短冊を見て土佐山の未来は明るい、とそう思えた。(原田沙央理)